

大垣市学組情報「よもやま」

大垣市学校職員組合委員長

牧田小学校 横幕 将成

1. はじめに 全日教連「日本教師台湾訪問団」の一人として台湾を訪問しました

身振り手振りを交え、明るく美しい歌で迎えてくれた子どもたち
 私たちがいてもお構いなく廊下を駆け抜け、普段通り明るく過ごす子どもたち
 そんな子どもたちを明るく見守り、情熱をもって指導している先生方
 明るく楽しい中にも熱と真剣さでいっぱい授業



台湾は日本の鏡のようなところです。車は右側通行です。都市には数えきれないほどの高層ビルが立ち並び、新幹線も通っています。美しいショッピングモールもあります。一方で、日本統治時代の建物、特に官公庁の建物が今も大切に使われており、昔の商店街のような個人経営の食料品店や飲食店、屋台もたくさんあります。そして、ファミマやセブンイレブンは100m間隔であり、「やる気スイッチ」で有名なあの塾もあります。テレビCMも日本で見たことのあるようなものがたくさんありました。

たった4日間ですが、私は台湾の街も学校も出会った人たちも大好きになりました。一方で、「なぜこんなにエネルギーギッシュなのだろう」とその秘密を考えていました。その中に、私たちの働き方を変えるヒントがあるような気がします。そして、「それは台湾だからでしょ」ではなく、私たちの力で変えることができる、また、今変えようとしていることの成功事例として実現可能であると私は感じます。先生方、今、自分の学校と比べてどうだろうかと考えてみてください。



初春や鏡のような地に立てり

2. 子どもへの願い、教師への期待

2012年国民基本教育「108新課程(シラバス)」により、子どもたちの学んだことを自分の生活に活用する能力がアップし、教師の力がアップしたと言います。また、コロナ禍で特に周辺部の地域に重点的にタブレットPCを配置し、オンライン学習をすることで、全地域で同じレベルの教育ができるようになりました。現在タブレットPCは、都市部で6人に1台、周辺部の地域では1人1台、平均すると3人に1台配置されています。



子どもたちと教師の力がアップしたのは、子どもたちの付ける力と教師のやるべきことがはっきりしているからだと感じました。

子どもたち	教師
教育によって公民的な資質を向上させる 学んだことを生活に生かす	専門性を高める カリキュラム設計をする 子どもたちの反応、計画の妥当性を省察する

そのために

<input type="checkbox"/> 「自分がこう役に立った」「この部分で満足した」と次へのモチベーションにつながる心を育てる <input type="checkbox"/> 仲間との関わりを大切にする <input type="checkbox"/> 自分で決めたいと思う自律性を育む	<input type="checkbox"/> 子どもたちの学習ニーズに耳を傾ける <input type="checkbox"/> 既成概念のない思考に導く <input type="checkbox"/> 実生活の問題に目を向けるようにする <input type="checkbox"/> 複数の評価をして省察し、子どもたちに関わる <input type="checkbox"/> カリキュラムや授業の適切な修正をする <input type="checkbox"/> 足りないものは外部のヒト・モノに依頼する
--	---

☆日本との違いを考えてみると…

- ①日本では身の回りの課題を知ることではできるが、実際の実現可能な解決策を考えているとは言えない（＝社会への提案とは言えない）。
- ②日本では身の回りにある職業の「まねごと」をしているが、実生活の課題を改善しようとする思いまで高めることはない（＝感想程度）。

教師のモチベーションが高いことも感じられます。訪問させていただいた学校の校長先生は、こうおっしゃっていました。

「授業準備も大変で保護者からのプレッシャーも大きい。でも、給料は高くない。先生方はカリキュラムなど、自分たちで『デザイン』することが多い。クラスの問題もいろいろな先生と話し合っ解決している。

先生方は理想をもっている。先生は『偉い』ではなく、新しい方法で子どもたちの教育をしたいと考える先生が多い。自分も専門的な先生でありたいと思っている。

私（校長）も『ミスを恐れなくて！』と常に言っている。教師もこの学校にサポートされているという思いもある。」

日本の学校と同じくらい大変じゃないの？と感じます。しかし、先生も子どもたちも生き生きしています。そして、多くのことを学び、生かしていると感じます。私たちを迎えてくれた子どもたちの歌は、心を揺さぶられるすばらしいものでしたが、「どうだ！私たちはこんなことを学んでいるんだ！」と子どもたちからも先生からも強い自信を感じました。



我が学び誇る子の歌初日記

3. 学校の理想を形に

訪問した学校の一つ、新竹市関埔小学校は、学校の理念を実現させるために学校と建築家が協働して設計された最新鋭の学校です。その建築家の中には日本人の手塚貴晴氏もいらっしゃいます（新竹市の学校のデザインを多く手掛けられているようです）。

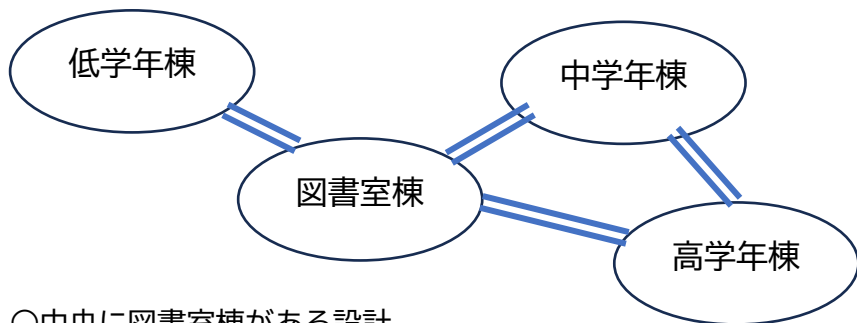
学校は「新竹サイエンスパーク」の中にあります。ICT産業が盛んな台湾の中でも中心的な地域で周りは高層住宅群、保護者も高所得者層が多く、教育に関する関心も高いとのこと。児童数は1810名。併設の幼稚園もあります。教職員数は120名です。学校は、パブリックアート（公共芸術）の考え方を取り入れていて、高層の建物、コンクリートの中で育つ子にどんな環境を与えるか、学校と建築家が協働して考えました。



総務主任（教頭）	建築家	教務主任
学校の理念を説明	理念を実現できるような設計プランを提案する	教育課程をこの施設で実現可能かどうか検討する

空間と子供がこの学校の主役であるという考えのもと、アースカラーを多用し、この世界のリアルを大切にし、自分がいるところからいろんなものが見える設計（=好奇心が育つ）にし、魂が自由の育つことを大切にするため、「余白」の空間を生かして自分と友との新しい遊びを創造できる構造になっています。空を見せるために、3階建てで、屋上でも（屋上で安全に遊ぶ試験に合格したら）遊ぶことができます。

校舎全体のイメージ



○中央に図書室棟がある設計

少子化ですべての教室を使わなくてもすむ時が来たら、各棟はコミュニティースペースなど別の施設として活用することも考慮している。

○運動場、体育館は建築中…この工事の過程も学習として見えるようにしている。

○あちこちに「すき間」や「隠れ家的な空間」がある。

○廊下を走ってはだめというルールはない 実際には人がぶつかることを考えず走っているし、客がいるのに近くでキックしたり体操したりする児童がいる。

=けがはするが、したらお互い助け合いながら保健室に来る 学んで走らなくなったり、気をつけたりする。

この建物を生かして、学習の中に総合的な学習の時間のような「建築プログラム」が存在します。

1年生	五感で学校そのものをさわる（知る）・素材でゲームを作る
2年生	秘密基地づくり
3年生	かくれんぼ
4年生	小さな動物の家づくり（SDG'sの考え方を生かして）
5年生	この学校の思い出 公共空間について考える
6年生	年の中の学校、何が必要となる？ （町づくりやコミュニティー 白川郷の事例も参考にしている）

英語は1年生から専科の先生が担当するなど、教科担任が結構入っています。英語、科学、芸術（ダンスなど身体表現も含む）、音楽は専科が入るそうです。一人の先生が担当している授業時間は週22時間程度。台湾ではこの程度の時間数が当たり前だそうです。

ICT教育に関するデジタル教材の導入については、教育部（日本の文部科学省にあたる）に担任の先生が計画書を国に提出、申請します。サイエンスパークの近くなので、保護者も子どもも電子機器については精通しています。使っているのか？という声はあまり出ないそうです。

施設のすばらしさはもちろん、教師の理想と建築家の思い、子どもたちの学びが高い次元で融合した、まさに「理想を絵にかいた」学校でした。

子のための理想冬空で語る建築家

子が手を振るトム・クルーズになった錯覚

4. 教師の理想を実現するために

台湾教育部（日本でいう文部科学省）との懇談では、日本と台湾の教育について、テーマに沿って討議がされました。台湾教育部 次長 林明裕氏は日本と台湾の教育の違いについて、次のように話をされました。林氏は、日本を何度も訪れていらっしゃる方です。



日 本	台 湾
<ul style="list-style-type: none"> ・モチベーションや指導について一体感を作りやすい ・文部科学省が権力をもっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が意見を出せる ・子どもたちが遊び心をもっている（いたずらっ子…とも言える） ・協働している

(1) 不登校・いじめへの対応

義務教育の中での不登校の児童・生徒数は、2004年が4100人、2021年には2500人と減少。日本では約30万人と言われているので、圧倒的に少なく、なおかつ減少しています。台湾教育部からは以下の次のような対策をしていると説明がありました。

政府・行政	<input type="checkbox"/> いじめ防止の方法や調査方法について整備 <input type="checkbox"/> いじめ対応（報告）ダイヤルの設置 <input type="checkbox"/> 政府として、各学校でいじめ防止セミナーを開く 学年のスタートの時に各学校に行き、話をする。 <input type="checkbox"/> いじめの電話（一報）を受ける→市役所、対応部署に連絡＝一緒に対応する <input type="checkbox"/> 政府と連携して対応をさらに考える
学校	<input type="checkbox"/> 学校…調査をする→保護者も呼ぶ 結果、いい悪いよりもお互いの気持ちが伝わることを重視 <input type="checkbox"/> 生徒への心のサポートを行う 予防→コミュニケーション・サポート→結果・見直し（やったことを考えさせる） <input type="checkbox"/> 状況を把握し、市、政府と連携。強制的に戻すことも。
子どものケア	<input type="checkbox"/> カウンセラーは全国で6000人、サポート1600人（各校の規模で一校あたりは変わる） 教育学部の心理学科を出た人はこの仕事に就く 【参考】 日本：中学校区に1人 1000人に一人の割合 組合として1校一人を目指している <input type="checkbox"/> いじめられた子、いじめた子、どちらにも心の病気はないか確認する。→担任はもちろなかかわる サポートは緊急を要する場合

(2) 勤務時間

年間の授業数は、2010～2013年で、年間小学校46週、授業数は640～800コマ、中学校42週 580～672コマとのことです（日本は授業、やりすぎですね）。教員の待遇等については、以下のような変化があったそうです。

- 2011年に労働基準法で労働組合が作れるようになった。ストライキ権はない
- 2020年から先生への助成ができる補助金制度を作った
 - =教師の専門性をアップさせるため=イノベーションにつながる
 - =教師の自主学習能力のアップ

□12年国民基本教育「108新課綱(シラバス)」で、全教員に対し、1年に1度、公開授業をすることが決められている。

□先生の技能アップのための支援、学習会を作ることを進めている。

□教育局も計画的に研修計画を立てている

→市・政府 能力を高めるための補助金を出す

→大学における学びに対して補助金を出す

□大体小学校で22コマ

□残業代が出る 一般公務員より先生の方が給料は高い

←残業代が出ないこと、そして、日本の時間外勤務の時間数を聞いて、信じられないという表情をされ、「ストライキしないの?」と言われました。

【参考】人材確保法で他の公務員より多く給料が出ることになっているが、現在 0.35%多い程度 公務員は残業代が出るので、給与に「逆転現象」が起きている。

(3) ICTの活用

日本では一人1台のタブレット PC が配備されていますが、台湾は前述したとおり、平均して3人に1台の割合です。学級ごとに使う時間をずらすことによってタブレット PC を使う機会を増やしています。2022年から2025年で200億台湾ドル(約1000億円)の予算で機器等の充実を図る計画です。台湾は世界の ICT 産業の中心地です。ハード面はすぐそろうでしょうが、ソフトやアプリについて、子どもたちの教育のために何をそろえるとよいか検討しているようです。

□コンテンツの充実を図る

□実験したデータを記録、蓄積する

□学習用ゲーム …プログラムを使ってゲームを作り、お金を儲けることができるが、いけないことをするとそのお金を没収される

□英語学習に力を入れている。

→生成AIを用いて会話しつつ、学習を進める

→会話などの結果や内容をビッグデータ化する

□生成AIで、学習の場の提供(こうするといよいよ)をする

→学習者はそれをもとに学習を進める+自分なりに追究する

→ビッグデータとして蓄積・評価 ランク付けする

ただ受け取った情報を載せたり、その情報に答えたりするだけでは評価は低い

感じたことをまとめてみます。

学校の施設について、日本とそこまで差を感じることはありませんでした(和式のトイレも普通にあります)。しかし、以下の点について、大きな違いを感じました。

①行政と学校がしっかりと手を組み、協働していること

②定められた授業時数が少なく、教師が勤務時間の中で余裕をもって仕事ができること

③教師力アップを教師自身も望み、そのために行政が適切に応えるシステムができていること

1・2年生は午前授業だそうです。その時間になると家族がたくさん迎えに来ていました。先生方はお茶をしながらミーティングをしています。教科担任の先生が授業している間、担任の先生方は自分の仕事を教室でしながら子どもたちを見守っていました。授業中は全力で子どもに向かい、余裕をもって仕事をしている感じです。残業もほとんどなさそうですが、授業準備や授業のアイデア作りのための時間は十分とれているようです。

上記の中では、②の授業時数に関しては国に対して要望を出していくところだと思いますが、①と③については、市町の教育委員会に対して具体的に要望することで変えることができるのではないのでしょうか。いじめ・不登校については、やはり話を聞いて寄り添ってくれるカウンセラーや相談員の存在は大切です。予算の問題がありますので、これから強く国や県に要望をしていく必要があると感じます。

仕事始優しい味のお茶にあう

(教育部で出していただいたお茶が本当に薄かったです。「お茶風味の水」でした。ある先生が「優しい味ですね」と言いました。すてきな表現だなと思い、私も薄い味を「優しい味」と言うようになりました。)

5. 最後に



海外の学校、教育についてふれる機会は人生においてまずありません。そんな貴重な機会をいただきました。ありがとうございました。毎日が感動の連続でした。先生方の働き方にも何かヒントになることがあるのではないかと思います、この文章を書いています。この訪問の課題として、一日一句を自らに課し、グループ LINE で発表していました。下手な句ですが、「おくの細道」風に載せさせていただきました。

日本と台湾の教育に差があるとは思いません。しかし、最近の OECD の調査 (PISA) では、台湾の数学的リテラシーは世界第5位です。先生も子どもたちも明るく楽しく真剣に学校生活を送っているからこそ、大きな教育成果を上げているのではないかと感じます。では、それを実現するために何ができるのでしょうか？学校でできることもあると思いますが、教育委員会に具体的に要望したり、協働したりすることが必要になるでしょう。国にも訴えていく必要があります。組合員みなさまの声やアイデアをぜひいただきたいと思えます。

台湾では旧正月 (春節) に正月を祝うので、訪問した1月3日から7日はいつも通り授業があり、街もいつも通り動いています。総統選もあり、街は選挙一色でした。台湾の都市部の人は、家庭で料理をあまりしないそうです。自分で作るより帰りにあちこちにある飲食店や「夜市」に寄ってテイクアウトした方が安くおいしいご飯が食べられるからだそうです。仕事帰りに同僚どうし食べて帰ることも普通のことです。子どもの朝ごはんもテーブルの上に100台湾ドル (大体500円) を置いておき、「これでどこかで買って食べて学校に行きなさい」と言われるとか (おつりはしっかり自分のものにするそうです)。役割分担がはっきりしていて、自分ができることを自分で考えて動くのが台湾の「よさ」なのかなと感じます。

この訪問団には多くの若い先生が参加されていました。参加するためには少し「条件」もありますが、ぜひ、来年度以降若い方にも参加してほしいなあと思います。全国の先生方と、気候と同じぐらいあたたかい台湾のみなさんから多くのことを学べる宝物のような時間でした。